

白氏文集 四十三

情に感ず

平成三十一年六

加藤淳平

曾て東隣の嬋娟の人より、手づから作りし布靴を贈られたる樂天が、若き日の思ひ出。
女性の自ら布靴を手造りし、親しき人に贈る習慣、今も中國にあり。

感情

情に感ず

中庭煞服玩

中庭に服玩を煞し

忽見故郷履

忽ち見る 故郷の履はきもの

昔贈我者誰

昔 我に贈りし者は誰ぞ

東隣嬋娟子

東隣の 嬋娟子なり

因思贈時語

因つて思ふ 贈る時の語ことば

持用結終始

持して用ゐ 終始を結びて

永願如履綦

永く願ふ 履綦の如く

雙行復雙止

雙なび行き 復雙なび止まらんと

自吾謫江郡

吾 江郡に謫せられてより

漂蕩三千里

漂蕩すること 三千里

爲感長情人

長情の人に 感ずるが爲に

提攜同到此

提攜して 同ともに此ここに到る

今朝一惆悵

今朝 一いっに惆悵し

反覆看未已

反覆して 看れども已まらず

人隻履猶雙

人は隻ひとりなれど 履は猶ふた雙つなり

何曾得相似

何ぞ 曾つて相似るを得んや

可嗟復可惜

嗟なげく可く 復惜しむ可し

錦表繡爲裏

錦の表 繡を裏と爲す

況經梅雨來

況んや 梅雨を經來たり

色黯花草死

色黯くみずみて 花草死せるをや

(大意) 中庭で衣類や道具類を虫干しして居たら、故郷から持つて來た布靴が眼に付いた。それを昔私に贈つてくれたのは誰かと云へば、東隣りに住んでゐた美しい女性である。ゆくりなくも、贈つてくれた時の言葉を思ひ出した。「持つて行つてずつと長くお使ひになり、私のことを思ひ出して下さいね。この一双の靴のやうに、二つ並んで行き、二つ並んで止まることを長く願つて居りますわ」。私は長江の岸の江州の地に左遷されて、三千里も旅して來たが、昔の人の長い情愛を忘れないために、ここまで一緒に持つて來た。今朝これを見て、昔の人のことを懐かしく思ひ出し、何回も布靴を、引つ繰り返して見て飽きない。人は別れて一人になつてしまつたけれども、靴は今も二つそろつてゐる。どうして人生は、靴のやうにはならないのだらうか。靴を見てみると、嗟嘆の念と哀惜の念が押さえられない。靴の表は錦、裏には刺繡が施されているが、梅雨の季節を經過して、色は黒ずみ、花や草は死んでしまつたのだから、尙更のことである。

(令和元年四月二日受附)

